推論結果を導く談話標識 then について [1]

西川　眞由美

［要約］

本研究では、談話の中で先行発話の内容を基に推論した結果を後続発話で伝えるために使用される談話標識 then（DM then）について、聞き手の解釈においてそれが関与する推論のメカニズムを明らかにする。DM then については、Halliday & Hasan(1976)や Schiffrin(1987)、松尾(2013)で分析されてはいるが、いずれも実際に使用されている DM then の実態を完全に説明しているとは言い難い。また、類似機能を持つ DM so との違いにもあいまいな部分を残している。本稿では、Halliday & Hasan(1976)や松尾(2013)の研究を参考にし、新たに認知語用論の枠組みで DM then を含む発話解釈における聞き手の推論プロセスにおいて DM then によって関連付けられるものは何か、それらをどのように関連付けるのかを特定することにより、その談話内で果たす機能的意味を明らかにする。また、それにより先行研究で指摘された DM then の様々な特徴にもより妥当な説明が可能であることを示す。

Key word: 談話標識(discourse marker)、認知語用論、文脈

１．　はじめに

談話標識 then（以後 DM then と称す）は、様々な談話の中で「それから、次に」の意でできごとの順序を表したり、「それでは」の意で話題の転換や会話の開始や終了などの談話管理機能を有する。さらに、話し手の推論と関連し「それなら、そうすると」の意で、後続発話の内容が先行発話から導出される結論であることを聞き手に示すために用いられる(Halliday & Hasan 1976: 259; Schiffrin 1987: 122-133; 松尾 2013: 4; 談話標識用法辞典 2015: 93-100; Biber et al. 1999: 878, 1074; Swan 2016: 143)。それぞれの用法を示す(1)(2)(3)の例を見てみる(*OALD9*)。

(1) First cook the onions, ***then*** add the mushrooms.
(2) 'I really have to go.' 'OK. Bye, ***then***.'
(3) Why don't you hire a car? ***Then*** you'll be able to visit more of the area.

(1)は、「最初に玉ねぎを調理し、それからマッシュルームを加えてください」というように調理において次の段階に移る指示を与える際に DM then が使用されている。(2)は会話を終了する場面で、「そろそろ失礼するよ」といとまごいする相手に対して、DM then を使い「じゃあ、さよなら」と応答している。(3)は、「車を借りたらどうだろう」という自らの提案に関し、「そうすれば、周辺地域をもっと回れる」という話し手の推論的結論を相手に提示している。

(2)や(3)に見られるように主発話が先行発話によって与えられた情報を基に導出した推論結果を示す DM then の用法は DM so においても見られる。(4)を見てみる。

(4) 'It's more expensive to travel on Friday.' '***Then***/***So*** I'll leave on Thursday.'
(Swan 2016: 583)

ここでは「金曜日に移動すると高くつく」という先行発話の内容を受け、「(では) 木曜日に出発しよう」という話し手の結論を DM then と DM so の後で述べている。ところが、Swan によると、(4)のように相手の発話に対する応答の中では DM so と DM then の両方の使用が容認されるが、(5)のように同じ話し手の連続発話の中では DM so のみが容認され DM then の使用は不可としている。(4)と(5)においては、DM so と DM then は両方とも全く同じ先行発話を基に推論した結論を後続発話で導入するために使用されている。それにもかかわらず、このような違いが出てくるのはなぜだろうか。

(5) It's more expensive to travel on Friday, ***so*** I'll leave on Thursday.
(NOT. . .~~***Then*** I'll leave on Thursday.~~) (ibid.)

本稿では、談話内で話し手の推論結果を表す DM then に焦点を当て、映画や小説の中の会話で使用されている様々な用例を詳細に分析することにより、DM then が聞き手の解釈における推論メカニズムにどのように関わっているのかを考察し、その談話機能を明らかにすることを目指す。また、そうすることで、先行研究で取り上げられているいくつかの特徴をなぜ DM then が有するのかについても妥当な説明が可能であることを示す。まず、２節では、推論結果を表す DM then についての先行研究を２点取り上げ概説する。３節では、先行研究で指摘された DM then の特徴を概説するとともに、映画や小説の中の用例を用い DM then が実際どのように使用されているのかを分析することで先行研究の問題点を明らかにする。４節では、類似した機能を持つ DM so と比較しつつ、DM then は発話解釈における聞き手の推論過程にどのように関わるのかについて認知語用論の視点から新たな考察を試みる。[2]

２． 先行研究

DM then に関する先行研究には、結束性(cohesion)の観点から接続語(conjunctive)としての then の役割を分析した Halliday & Hasan(1976: 241, 256-261)、一貫性理論(coherence theory)の枠組みで考察した Schiffrin(1987: 246-266)、語法研究の観点から DM so と比較することで DM then の機能の説明を試みた松尾(2013)などがある。本節では、特に推論結果を表す DM then に焦点を当てた Halliday & Hasan(1976)と松尾(2013)の研究を取り上げる。

２．１ Halliday & Hasan(1976)

Halliday & Hasan によると、接続語 then はコミュニケーションのプロセスにおいて因果関係に関わる内的意味(Internal)を有し、「あなたの言うこと（または他の証拠）から判断して次の結論に達する(I conclude from what you say (or other evidence))」という話し手の推論過程(reasoning process)について言及する言語形式であるとしている(1976: 257)。[3]また、then は、接続関係(conjunctive relation)の１つで「a が可能；もし a であれば、それなら b（'possible a; if a, then b'）」の意を持つ条件的タイプ(conditional type)の最もシンプルな形式と述べている。さらに、then が「こういう条件のもとでは(under these circumstances)」という条件関係を表す場合、①因果関係(causal relation)と条件とが重複し 'if, as is the case ~, then ~' 'if/since ~, (then) ･･･' の意を表すタイプ、②仮説を表すタ

イプ、の２つのタイプがある(1976: 259)。(6)と(7)の例はそれぞれ①と②を示している(1976: 258)。

(6) ‘And what does it live on?’
‘Weak tea with cream in it.’
A new difficulty came into Alice’s head.
‘Supposing it couldn’t find any?’ She suggested.’
‘***Then*** it would die, of course.’

(7) ‘Have some wine,’ the March Hare said in an encouraging tone.
Alice looked all round the table, but there was nothing on it but tea. ‘I don’t see any wine,’ she remarked.
‘There isn’t any,’ said the March Hare.
‘***Then*** it wasn’t very civil of you to offer it,’ said Alice angrily.

そして、Halliday & Hasan は、so と then は両方とも因果関係に関与する内的意味を持つ接続語であるが、then が①と②の両方の条件関係を表すために使用可能であるのに対して、so は①にしか使用できないと分析している。言い換えれば、then は条件と因果関係の両方に関与する一方で、so は純粋な条件のみを表すタイプには関与しないということになる。彼らの主張は示唆的であると思われるが、なぜそのような違いがあるのかについて具体的な説明はなされていない。

２．２　松尾(2013)

松尾(2013: 17)では、DM then は DM so と同様先行発話から得た情報を前提に導出した結論を提示する合図としたうえで、両者の決定的な違いは先行発話に対する話し手の態度・捉え方にあると主張する。

まず、so は先行発話で入手した情報を話し手が受け入れているときに使用されるのに対し、then はもともと ‘if ･･･then ~’ において if に導かれる条件節に対する帰結節で使用されることから、話し手がそれを完全に受け入れていない場合に使用されるとしている(ibid.)。つまり、DM so と DM then の１つ目の相違点は、話し手が先行発話の内容を完全に容認しているかどうかにあるというのである。

さらに松尾は、このような相手の発話内容の受け入れの可否が相手に対する話し手の態度と関連しているとしている(2013: 16)。具体的には、so の場合、話し手は先行発話で入手した情報を受け入れ、それを確かな根拠として結論を導いているので肯定的な態度をと

る場合が多く、逆に then の場合は、話し手が先行発話の内容を完全に認めていないので、話し手の態度は否定的・反駁的・挑戦的であるというのである（話し手の伝達態度については 3.3 で詳しく議論する）。DM then が相手の先行発話の内容を完全に認めていない場合に使用されるという松尾の指摘は直観的に正しいように思われるが、それが具体的な解釈のプロセスにおいてどういうことを意味し、どのように聞き手の推論プロセスに関連するのかなどは詳しく説明されていない。

３． DM then の特徴

DM then の用法上の特徴についても、先行研究でいくつか言及されている。本節では、それらのうちから、①同一話者の連続発話では使用されない、②先行情報は言語情報のみ、③先行発話（あるいは相手）に対して否定的な態度を伝える、④DM so と共起する、の４つを取り上げ、それぞれを概説しつつ、映画や小説の会話からの事例を用いながらその問題点を明らかにする。

３．１ 同一話者の連続発話の中での使用

(5)の例が示すように、DM then は DM so と異なり、同一話者の連続する会話の中では使用できないとされている(Swan2016: 583 ; 松尾 2013: 2 ; 談話標識用法辞典 2015: 94)。その理由について、松尾は「then で自らの発話内容を根拠にして推論することはできない」(2013: 2)からだと述べている。例えば(4)では、相手の発話内容「金曜日に移動すると高くつく」という内容を根拠に「木曜日に出発しよう」という結論を述べており、so と then ともに使用可である。２．２で見たように、松尾は DM so の場合は話し手は先行発話の内容を受け入れ、DM then は完全に受け入れてない時使用されるとしている。先行発話が相手のものである時、話し手はそれを受け入れる場合と完全に受け入れない場合があり、よって両方の DM が使用可となる。一方、(5)のように自らの発話内容を根拠に推論した結論を述べる場合 DM then は不可となるのだと考えられる。それは、「金曜日に移動すると高くつく」という陳述をするということは話し手自身がその内容を認めているということを意味し、それを完全に受け入れない場合に使用される DM then とは整合しないからである。

しかしながら、同一話者の連続する会話の中でも DM then の例が観察される。(3)(8)(9)を見てみる。

(3) Why don't you hire a car? ***Then*** you'll be able to visit more of the area. （*OALD 9*）

(8) Kate: You take care of those dishes and I'll take care of these. ***Then*** we won't get in each other's way. （映画 *No Reservations*）

(9) Rita: Sam, you know there's one option we've never talked about. I… I know what you went through the last time you took the stand.
Sam: Yeah, I'll tell you I didn't like that at all.
Rita: Well, we could give the foster parents guardianship… and ***then***… and ***then*** we could… we could try for the… the… the most incredible visitation rights and it would almost seem like joint custody. (映画　*I am Sam*)

(3)では、「車を借りたら」という自らの提案を基に「(そしたら) もっといろんな場所を回れる」という結論を述べている。(8)は、シェフのケイトが新しく着任した準シェフのニックに対して仕事の分担を指示している場面である。「あなたがあっちの料理を、私がこっちの料理を担当する」という自らの提案を仮定して推論した結論「(そうすれば) お互い邪魔にならず仕事ができる」を DM then 以下で述べている。(9)は、精神障害があり、愛する娘ルーシーと引き離されたサムが法廷で養育権を確保するために弁護士のリタと対策を練っている場面である。リタは、里親に養育権を譲る提案をすると同時に、そうすることによって得られるであろうメリット「共同親権のような好条件での訪問権を要求できる」ことを DM then の後で述べている。これらの例に共通しているのは、先行発話の内容が事実そのものを表す陳述のようなものではなく、提案や命令のような形で話し手自身の考えを表出した内容の発話だということである。つまり、DM then が使用される場合、先行発話が相手のものであれ自らのものであれ、話し手にとって確実な事実でさえなければどのような情報でも、それを仮定して推論した結果を述べるために使用できるのである。

３．２　推論の前提となる情報の種類

DM so は先行発話が存在しなくても発話状況などから得た情報をもとに導いた結論を導入することが可能である(Blakemore 1988: 189; 1992: 139)。例えば、(10)のように「最初の曲がり角を左に曲がって」という A の発話内容と同様、(11)のようにその状況で入手可能な知覚情報を基に導出した「(ということは) 大学の前を通らないのだ」という結論も又 DM so によって導入できることを Blakemore は示している。

(10) A: You take the first turning on the left.
B: ***So*** we don't go pass the university (then). (Blakemore 1992: 139)
(11) [Hearer (who is driving) makes a left turn.]
So we're not going past the university (then/ after all/). (ibid.)

一方、DM then の場合推論の前提となる情報は言語情報に限定され、非言語情報には用いられないとされている（松尾　2013: 15)。松尾はその理由を、DM then の場合話し手は相手が提供する情報を確固たる事実として認めているわけではないという性質を持っているからとしている。つまり、非言語情報は実際の発話状況で生じている事態であり、話し手はその事実を受け入れざるを得ない。したがって、DM then の使用は不可だというのである。実際、DM then が非言語情報とともに用いられる例は見つけることはできず、この指摘は妥当であると考える。

３．３　DM then の使用によって伝えられる態度

松尾(2013: 6, 16-17)では、DM then の使用によって話し手の否定的・反駁的・挑戦的態度が伝えられるとしている。なぜなら、DM then は相手が提供する情報を話し手は確固たる事実として受け入れない状況で使用されるので、おのずと相手への否定的な態度が生まれるというのである。確かに(12)(13)(14)では話し手の強い反駁的態度が伝えられているのが読み取れる。

(12)Erica: What are you, possessed? How could you say those things?
Zoe: It seemed really obvious to me, the injustice of it. Thank God men die younger than us. It's the only break we get.
Erica: ***Then*** you know what? Write a dissertation on it, don't announce to the world that I stay in night after night after night and by the way, one night after night would have been enough.　(映画　*Something's Gotta Give*)

(13)William: So, I saw you put that book down your trousers.
Thief: What book?
William: The one down your trousers.
Thief: I haven't got a book down my trousers.
William: Right --- well, ***then*** we have something of an impasse. I tell you what --- I'll call the police --- and, what can I say? --- If I'm wrong about the whole book-down-the-trousers scenario, I really apologise.　(映画　*Notting Hill*)

(14) "Well, there's your motive!" Paige exclaimed. "Ken Mallory had to shut Kat up before Lauren Harrison found out about her. You've got to arrest Mallory." She was almost yelling into the telephone. "Wait a minute. Calm down, doctor. We may have a motive, but I told you, we don't have a shred of evidence. You said yourself that Dr. Hunter would have abortion on her. After I spoke to you, I talked to our

forensic pathologist again. There was no sign of any kind of blow that could have caused unconsciousness." "***Then*** he must have given her a sedative," Paige said stubbornly. "Probably chloral hydrate. It's fast-acting and…"

(Sheldon, *Nothing Lasts Forever*)

(12)は、エリカが、初めて会った娘のボーイフレンドとの夕食の席で、魅力的で脚本家として成功しながら離婚して一人寂しく夜を過ごす自分のことを話題に取り上げた妹のゾーイ（女性学の研究者）に対して、「どうして人前であんなことを言うのか、もし考えていることがあれば論文に書けばよい、私生活を人前で明かさないでほしい」と苛立ちをあらわにする場面である。(13)は、ウィリアムの書店で万引きしようとした男に、そのことを確認したところ、男が否認する場面である。ウィリアムは「もし万引きをしていないと言い張るのなら」と仮定し、「警察を呼ぶ」という結論を伝えている。(14)は、女性医師のページが友人の医師カットは元恋人だったケン・マロニーに殺されたと主張している場面である。警察はいろいろと調べたがそのような証拠は見当たらないことを述べるが、それに対してページは（同じ医者の立場から）「鎮静剤、それも一番効果の早い麻酔剤を与えたに違いない」と頑固に反論を展開している。これらの例では、明らかに DM then を使用することで相手に対する話し手の強い反駁的態度を伝えている。

一方で、相手に対してそのような否定的な態度を伝えない例も見られる。(15)を考える。

(15) Rita: [. . .] So, George says that you… you needed a break from work.
Sam: I don't really wanna work there anymore because there's too many people.
Rita: Okay. ***Then*** maybe we can find you a quieter job, because… remember that was one of the judge's conditions, that you earn money.　（映画　*I am Sam*）

(15)は、娘のルーシーの養育権を法廷で争っているサムが「今まで働いていた店は客が多すぎるのでもう働きたくない」と弱音を吐く場面である。これに対し弁護士のリタが、「（そういうことなら）もっと静かな店を見つけましょう」と勇気づけている。この例では、話し手の反駁的・挑戦的な態度というより、「もしあなたが本当にそう思っているのなら」と相手への思いやりすら感じられる。さらに、(3)(8)(9)のような同一話者の連続する発話の中で使用される DM then の場合には、結論の情報源となる先行発話は自らが発したものでもあり、DM then によって相手への否定的な態度を伝えることは難しい。まとめると、DM then を使用する話し手が伝達する態度は、その話し手が推論の前提とする先行発話の内容を完全に受け入れていないことと直接の因果関係はなく、あくまで使用文脈の中で語

用論的に出てくるものであると考える。

３．４　DM so との共起

DM then は、同様に推論結果を表す DM so と共起することがある。DM so は（しばしば予想通りの）結果が導き出されることを表し、先行研究では DM so と共起する場合は DM then は(16)(17)のように文尾に来るとされている(Schiffrin 1992: 781; 談話標識用法辞典 2015: 97)。

(16) “You speak German?” “Yes.” “Ah, ***so*** you're not Russian, ***then***?” “No.”
(Archer, *Kane*)

(17) “And what of your perspective, as an Irish-American, on the Troubles?” the *Telegraph* wanted to know. “We have enough problems of our own in America without having to borrow yours.” “***So*** you say we should solve it, ***then***?” “What do you think? Isn't that what problems are for?” (Clancy, *Patriot*)

しかしながら、(18)(19)の例で見られるように、DM so と DM then が共起する場合、必ずしも DM then が文尾に生起するとは限らない。文頭の DM so に後続する形で現れる場合もよく見られる。[4]

(18) Man: The bedroom?
Frances: Nope.
Man: Kitchen?
Frances: No.
Man: ***So then*** we're done.
Frances: We're done. (映画　*Under the Tuscan Sun*)

(19) Nash: Adam Smith was wrong.
Hansen: What are you talking about?
Nash: If everyone competes for the blond…We block each other and no one gets her. …***so then*** we go for friends… But they give us the cold shoulder, because no one likes to be second choice. Again, no winner.
(映画　*Beautiful Mind*)

(18)は、離婚することになったフランシスが、長年住み慣れた家を出る場面である。引っ

越し業者がすべての荷物を運び出し、最後に寝室と台所の荷物も持って出ないことを確認した時点で「では、これで全て終了」と述べている。(19)は、数学者のナッシュがアダム・スミスの経済理論への反論を友人たちに披露している場面である。「皆が金髪の女性をめぐって争うと、互いにぶつかって、誰も彼女をものにできない」という条件のもと、「(だから）彼女の友人を狙うことになる」という結論を述べている。

ただ、２．２では、DM so は先行発話内容を話し手が受け入れている時に使用されるのに対して、DM then が使用されるのは話し手がそれを受け入れていない時であるという先行研究の分析を見た。では、そのような全く異なる状況で使用されるはずの両者が共起するのはなぜだろうか。松尾はその理由を、DM then が持つ話し手の強い否定的な態度を DM so が持つ賛同的な態度によって緩和させる、あるいは、DM so が持つ同調的な態度を DM then が持つ否定的な態度で軽減するためだとしている(2013: 14)。しかしながら、(18)(19)の例において、話し手の態度は極めて中立的であり、同調的でも否定的でもない。ましてや、いずれかのニュアンスを軽減する必要もなさそうである。本稿では、この２つの DM が持つ談話機能は異なっており、両方の DM が共起するのはその両方の機能が当該文脈において必要だからであると考える。

４．　考察

３節では、先行研究の中で述べられている DM then のいくつかの特徴を概説した。また、映画や小説の中で使用されている事例を詳細に分析することによりそれらに関する問題点を明らかにした。本節では、新たに認知語用論の枠組みを使い、DM then の使用文脈を考慮に入れることで、先行研究で指摘された DM then の役割や特徴を再検討するとともに、その機能的意味を特定することによって、先行研究から出てきた問題点の解決を目指す。

４．１　DM then の談話機能

DM then は、DM so と同様、先行発話から入手した情報を基に話し手が推論し導き出した結論を提示することを示す機能を持つと考えられる。しかしながら、(4)のように両者とも使用できる文脈が存在する一方で、(5)のように DM so しか使用できない場合もある。さらに(16)(17)(18)(19)のように共起することもある。このことから、この２つの DM の機能は厳密には異なることは明らかである。では、両者の違いはどこにあるのだろうか。ここでは、DM then は何と何をつないでいるのか、またそれらをどのように関連付けるのかに着目し、DM then の談話における機能的意味を考察する。

DM then も DM so も、前提となる情報 P と結論となる情報 Q が解釈における認知構造

に存在し、「P then Q」「P so Q」のスキーマの中で使用される。では、聞き手は解釈プロセスの中で前後の情報 P と Q をどのようなものとしてとらえているのだろうか。DM so の場合は、前後の情報は命題と命題、発話行為と発話行為のようなメタ言語的なものに関与する(Blakemore 1987, 1988; 西川 2016a, 2016b, 2017)。以下の例を見てみる。

(20) a. She was never really happy here. ***So*** she's leaving.
b. She'll be better off in a new place. --- ***So*** she's leaving?
(Halliday & Hasan 1976: 241)

(20a)は、「彼女はここでは決して幸せではなかった」という事実と「(したがって) 彼女は(ここを) 去ろうとしている」という２つの命題内容(出来事)を因果関係でつなげている。一方、(20b)で DM so が関連付けているのは、最初の話し手が発話を通して伝える「彼女は新しい土地に移れば元気になるだろう」という考えと、それを受けてもう一人の話し手が「(ということは) 彼女は出ていくんだ」という結論との因果関係である。つまり、DM so は命題と発話行為の両方の解釈レベルで、先行情報 P から Q という結論(文脈含意)を導出するために使用されていると考えられる。[5]

DM then はどうだろうか。例えば、(20)の DM so を DM then に置き換えた(21)を考えてみる。ここで、(21a)では因果関係の読みは生まれず、時間的な解釈になってしまう。「彼女はここでは決して幸せではなかった」という事実を表す命題と「ここを出ていこうとしている」という命題、つまり純粋な出来事を前提と結果という形でをつなぐことができないのである。一方、(21b)の例では、「彼女は新しい土地に移れば元気になるだろう」という相手が伝える考えに対して「(じゃあ) ここを出ていくだろう」という話し手の結論につなげることが可能である。

(21) a. She was never really happy here. ***Then*** she's leaving.
b. She'll be better off in a new place. --- ***Then*** she's leaving?

つまり、DM then は命題レベルではなく、「～と思う」「～と考えている」「～だと信じている」というような会話参与者の発話のメタ言語レベルで推論プロセスが働いているものと考えられる。発話解釈において、発話によって伝達される内容には頻繁にこのような高次な(メタ言語的)レベルの内容が関わってくる。たとえば、A が B に 'You are fine.' と言った場合、それが陳述であれば 'A thinks/believes that B is fine.'、質問の場合には 'A is asking whether B is fine.' などの潜在的な意味形式を持っていると考えられる。同様に

A が B に対して ‘You can do that.’ と発話した場合、信念なら ‘A believes that B can do that.’、提案なら ‘A is suggesting that B can do that.’、要求なら ‘A is asking B to do that.’、命令なら ‘A is telling B to do that.’ などの意味内容を伝達している。[6]そして、このような伝達される厳密な話し手の意味（意図）は文脈に応じて聞き手の解釈に委ねられるのである。聞き手の解釈の推論プロセスにおいて DM then が関与するのはこのようなメタ言語のレベルであると考える。

次に、DM then は先行発話と後続発話によって伝達される「～と考えている」などの高次レベルの意味内容どうしをどのように関連付けるのだろうか。それは、Halliday & Hasan が「条件的」と述べているように、先行発話の情報を仮定して推論した結論を後続発話で提示する形で関連付けると考える。もともと推論結果を表す DM then の用法は ‘if ~, then・・・’ の構文に由来している。そして、推論の前提条件となる if 節の内容が「～と考えている」などのメタ言語的な伝達内容を持つ先行発話として独立し、それに置き換わることは容易に想像できる。

本分析は、２．１で取り上げた Halliday & Hasan の主張とも一致する。彼らの主張では、DM then は①因果関係と条件とが重複するタイプ、②仮説を表すタイプ、の２つの条件関係のタイプを持つとしている(1976: 259)。本考察の DM then が「もし P なら、Q」という構造を用法に持つのであれば、②のタイプは仮説的なので問題ない。①のタイプに関しては条件と因果関係の両方が関係するが、オールド他（1977: 42）によれば「もし～ならば・・・」の意味構造を持つ場合、いやおうなく前件と後件の間に因果関係とか論理的帰結が存在すると述べている。したがって、因果関係と条件関係が重複する場合にも DM then が使用されるのは当然のことと思われる。

また、この分析は、松尾(2013)で指摘された「DM then は先行発話の内容を話し手が完全に受け入れていない場合に使用される」という分析とも合致する。DM then を使用する話し手は、先行発話から得た内容に対し「もし、本当にそう思う（考えている、信じている）のなら」と仮定することによってその事実性や真性から一旦身を引くことになる。それにより解釈において「話し手は情報内容を完全に受け入れていない」というニュアンスが出てくるのである。

４．２　DM then の特徴に関する説明

本分析によって DM then が持つ様々な特徴にもより妥当な説明が可能となる。まず、３．１では、同一話者の連続発話の中では DM then は不可だという先行研究を紹介したが、実際にはそのような例が存在することを見た。DM then の談話機能は、先行発話の命題内容を含む「～と考えている」というようなメタ言語レベルの内容を一旦仮定し、それ

を基に推論した結果を後続発話で提示することである。したがって、先行発話が相手のものか自らのものかが問題なのではなく、「仮に～だとしたら」という解釈の推論プロセスに持ち込める可能性のあるものであれば、誰のどのような発話でも先行発話にとることは可能である。例えば、(4)(5)の例で考えてみる。

(4) 'It's more expensive to travel on Friday.' '***Then/So*** I'll leave on Thursday.'
(5) It's more expensive to travel on Friday, so I'll leave on Thursday.
(NOT. . .~~Then I'll leave on Thursday.~~) (Swan 2016: 583)

(4)では、「金曜日に移動すると高くつく」という発話は相手によって発されたものである。発話内容をそのまま事実として受け止め「(では) 木曜日に出発しよう」という結論を出すことが可能である。また、相手が正しいと信じている情報として推論し、「もしあなたが本当にそう思うのなら」と仮定して同様の結論を導くことも可能である。従って、DM then も so も使用される。一方、(5)は同様の内容が自分の発話として提供されるので「もし本当にそう信じているのならば」という仮定をすることは不自然である。したがって、DM then を容認することが難しくなるのである。しかしながら、パンフレット等で得た情報、つまり誰かによって提供された情報を自分がただ繰り返しているという状況であれば、「もしこれが本当なら」という仮説に持ち込むことが可能になる。そうなれば、(5)でも DM then の使用は可能となるだろう。

第２に、３．２では DM then は DM so のように話し手が発話状況においてアクセス可能な非言語情報を前提としないことを見た。松尾が主張する通り、話し手自身が直接経験した刺激は疑う余地のない事実であり、それを仮定条件とするのはいかにも不自然である。したがって、DM then は DM so と異なり、P として可能な情報は言語情報からのみとなる。

３．３では、DM then を使うことによって生じる先行発話、あるいはそれを発する相手に対する態度について、否定的・反駁的・挑戦的だという松尾の分析を見た。そして、DM then によって伝えられる態度は必ずしも否定的なものだけではないこと、また自らの発話を受けて DM then が使われる場合はそもそも誰の何に対する否定的態度なのかを考えるのは難しいことを見た。認知語用論の枠組みによる本考察では、話し手によって伝達される態度は全て文脈次第と考える。つまり、話し手にとって芳しくない情報を基に仮定し、その結論も好ましくないものであれば、疑念や苛立ちのような否定的な態度を伝えることになるだろう。一方で、(15)のように「もしあなたが本当に忙しい店で働きたくないと思っているのなら」と相手の気持ちを察し、それを仮定条件として推論して出した結論を後

続発話で述べる場合は思いやりなどの肯定的な態度を伝えることにもなる。

３．４では、DM so との共起の例を見た。先行発話に対する話し手の受け入れという意味では全く相反する２つの DM が同時に生起するということは一見矛盾したことのように思える。このことについて松尾は、DM so と DM then が共起することによって、それぞれが持つ強い否定的態度と同調的な態度を緩和させ微調整するのだと述べている。しかし、2 つの DM によって伝えられる態度が必ずしも否定的･肯定的ということでなければ、常にこの理由は成立しないかもしれない。本考察では、DM so と DM then は基本的機能それ自体が異なり、共起の理由は両方の機能が当該文脈で必要であったからだと考える。DM so は当該文脈における文脈含意を後続発話で伝えることを合図するという機能を持つ。そして、DM then は先行発話で表出された内容を話し手が正しいと考えている、あるいはそう信じていると一旦仮定し、それをふまえて推論した結果を後続発話で伝えるという機能を有している。話し手はその両方を伝える必要があると考え、DM so と DM then の両方を使用するのである。

たとえば、(18)(19)は DM so を使って談話の総括をするところである。同時に(18)では、住み慣れた家を去りがたく思っているフランシスへの配慮から、引っ越し業者の男は DM then を使い「もしあなたが本当にもう何も持ち出さなくてもよいと思っているのなら」とフランシスの気持ちを再度確認しているのである。(19)でも、ナッシュが自論を展開する中で「もし本当に今言ったことが正しければ」と念には念を入れて議論の厳密さをアピールしている。DM then が文尾に来る(16)でも同様のことが言える。「ドイツ語を話す」という相手の発話内容から「(では) ロシア人ではない」という結論を述べた話し手が、最後に DM then を付け加え、自分の結論の前提である相手の内容を「もし本当にあなたの言ったことが正しいのであればね」と再度念押ししているのだと考えられる。

５．　結語

本稿では、先行発話を基に推論した結果を主発話で提示する DM then に関して、先行研究(Halliday & Hasan 1976; 松尾 2013)の分析を参考にしつつ、会話の中で見せる様々なふるまいも考慮に入れながら認知語用論の枠組みでその機能的意味を考察した。その結果、DM then が結論を導くための推論プロセスの基になっているのは、先行発話によって表出される命題内容ではなく、「～と思っている」「～と考えている」「～だと信じている」といった伝達内容であることを論じた。また、そこから導き出した結論もまた、主発話によって表される「～と考える」などの伝達内容であることを示した。つまり、DM then が関連付ける前後の情報は発話の命題レベルではなく、より高次でメタ言語的な解釈レベルであり、それらが推論プロセスにおいて働いていることを明らかにした。加えて、類似機

能を持つ DM so との相違点も明らかにした。まず、一番重要な相違点は機能的意味自体における違い、つまり DM then がメタ言語的なレベルでのみ働くのに対し、DM so は命題レベルと発話行為などのメタ言語レベルの両方の解釈レベルが推論プロセスにおいて働くことである。また、DM so は話し手が聞き手と共有する文脈想定を基にして（演繹的）推論によって導き出す結論（文脈含意）を後続発話にとるのに対し、DM then の場合は先行発話で伝えられるメタ言語的な内容を仮定して導き出した結論であることである。さらに、このことにより、なぜ同じ先行発話を有しながら DM so と then の両方が使用できたり、いずれか一方しか使用できない事例が生じるのかについても説明が可能になった。また、先行研究で指摘されたように、DM then の場合は推論の前提となる情報が言語情報に限定されること、DM so との共起の理由についてもより妥当な説明を与えることができた。

注

1. 談話標識という用語は統一された理論的定義を持たないが、本稿では、Schourup (1999: 230-4)で示された特徴(connectivity, optionality, non-truth-conditionality, weak clause association, initiality, orality, multi-categoriality)のいくつかを有し、「何らかの制約を課すことによって聞き手に主発話を話し手の意図した方向で解釈させるように仕向ける表現」という定義のもとに、談話標識という語を使用する。
2. 語用論とは、言語の意味をその使用の実態、つまり文脈の中でとらえることを目的とし、話し手の意図的意味、言外の意味（推論）、記号の社会的、文化的、心理的意味をその使用者と関連付けて研究するものである。一方、認知語用論は語用論が扱うそれらの問題を「脳の一般的認知原理と認知的概念分析に照らして明らかにする」（林　2009: 78）ものである。
3. Halliday & Hasan(1976)では、結束性のタイプを External と Internal の２種類に分類している。前者は、「言語がそれについて語る現象に内在する関係(the relations that are inherent in the phenomena that language is used to talk about)」とし、後者は「コミュニケーションプロセス、つまり話し手と聞き手のやり取りの形式において内在する関係(those that are inherent in the communication process, in the forms of interaction between speaker and hearer)」と定義している(1976: 241)。
4. この場合、so then はあるが、then so の順序では事例は見当たらなかった。
5. 関連性理論(relevance theory)の枠組みの中で談話標識の分析をした Blakemore(1988,1912)では、DM so は前後の命題内容を関連付ける言語形式で、「P so Q」において Q を P の文脈含意として解釈するよう聞き手の推論プロセスに制約を課す手続的意味を記号化する言語形式であると分析している。西川(2016a, 2016b, 2017)では、Blakemore の分析を談話構造にまで発展させ、DM so は命題レベルだけでなく発話行為などのメタレベルにも関与し、様々な談話の管理や調整という役割を担っていることを明らかにしている。
6. 関連性理論では、このような解釈における高次の伝達内容を高次表意(higher-level explicature)と呼んでいる。高次表意に関しては、Wilson and Sperber(1995: 14)参照。

参考文献

Biber, D., S. Johanson, G. Leech, S. Conrad & E. Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.

Blakemore, Diane. 1988. 'So' as a Constraint on Relevance. In: R. Kempson (ed.) *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, 183-195. Cambridge: CUP.

Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances*. Oxford: Basil Blackwell.

Halliday, M. A. K. & R. Hasan. 1976. *Cohesion in English*. London: Longman.

林宅男．「『認知語用論』の理論的基盤とその方向性」.『桃山学院大学総合研究所紀要』34(3), 63-83. 桃山学院大学.

松尾文子. 2013. 「推論結果を表す談話標識 so と then－先行発話に対する話し手の態度の違い」. 『梅光言語文化研究』第 4 号, 1-19.a　梅光学院大学国際言語文化学会.

松尾, 廣瀬, 西川. 2015.　英語談話標識用法辞典－43 の基本ディスコース・マーカー. 東京 : 研究社.

西川眞由美. 2016a. 「談話標識 so の多機能性についての一考察」. 『摂南人文科学』第 23 号, 25-42. 摂南大学外国語学部.

西川眞由美. 2016b. 「談話標識 so の話題調整機能について」. 『第１９回大会発表論文集』(Proceedings)　第 12 号, 145-152. 日本語用論学会.

西川眞由美. 2017. 「談話標識 so の多機能性について」. 『映画英語教育研究』(Proceedings) 第 23 号, 85-98. 映画英語教育学会.

オールウド・アンデソン、ダール. 1977. 日常言語の論理学（公平、野家訳）. 東京：産業図書.

Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English (9th edition, OALD9). 2015. OUP.

Schiffrin, Deborah. 1987. *Discourse markers*. Cambridge: CUP.

Schourup, Lawrence. 1999. Discourse Markers. *Lingua* 107, 227-265.

Sperber, D. and D. Wilson. 1986/1995. *Relevance-Communication and Cognition*. London: Blackwell.

Swan, Michael. 2016. *Practical English Usage.* London: Longman.

Wilson, D. and D. Sperber. 1995. Linguistic Form and Relevance. *Lingua* 90, 1-25.

Abstract

One of the roles of discourse marker (henceforth DM) *then* is to indicate that the speaker is signifying a conclusion based on what has just been said. Several researchers, such as Halliday & Hasan (1976), Schiffrin(1987) and Matsuo(2013), have studied the discourse role and the characteristics of DM *then*, which is sometimes compared to the DM *so* as having a similar function. Their studies, however, do not seem to account for exactly why and how the DM *then* is used by speakers in this context.

This paper focuses on the DM *then* in its function of introducing the results or conclusions derived from what has just been said, and I will closely examine the inferential process in the hearer's interpretation of utterances utilizing the DM *then* and make an attempt to clarify its functional meaning in discourse.